

TS（トータル・サティスファクション）を目指して⑰

カーリング女子日本代表に「在り方」を教わりました！ 校長室担当より

北京オリンピックでの日本人選手の活躍が毎日報道されていた中、一ファンとしてカーリング女子日本代表である「ロコ・ソラーレ」を応援していました。「ナイス～」「上手！」「うん！」「オッケー！」会場に常にポジティブな声を響かせる彼女たちに、人を惹きつける力を感じているのは私だけではないと思います。その一員である吉田知奈那美選手が次のように語っておられます。

「勝つことやメダルを取るといった能力や結果で評価され、その結果を喜んで応援してくれる人がたくさんいることは十分にわかっています。でも私たちは今、『それなら結果が出せない私たちには、人としての価値はないのか』とってしまいます。～中略～ カナダに行くと、『チーム藤沢は、いつも楽しそうにカーリングをする。勝っても負けてもあなたたちの試合を見るのが好きよ。』とってもらえる。それを聞くと私たちが氷の上に立つ意味はここにあると思えるんです。」

この吉田さんの話を聞いて、私たちは自分の人生において「自分は何を成し遂げたいか」や「他人からどう見られたいか」ではなく、「自分はどうありたいか」をより大切にすべきだと学びました。

私たちは皆、自分の人生を生きているはずなのですが、成果を出すことだけで人に認められたいと考えたり、人から何か言われたりしたことや人の目を気にしてひどく落ち込んでしまうことがあります。特に、「他人にどうみられたいか」という基準だけで行動している人にこういう方が多い気がします。このような自分軸ではなく、他人軸で人生を生きることは実にきついことだと思います。人生は選択の連続です。何か問題が起こった時や何か選択をしなければならない時、自分の在り方の基準が明確であれば、迷うことなく自分にとって良い選択ができます。そんな中で、常に『自分がどうありたいか』という土台部分が決まっていれば自分の理想やこう生きたいと思う自分に近づける選択ができます。ロコ・ソラーレの皆さんの、他の人をすべて幸福にするほどのほとばしる無邪気さは、実はこういった高い人間力に裏打ちされたものだと気づき

ます。

世界のベストセラーとされている、スティーブン・R・コヴィー博士著「7つの習慣」では、第2の習慣「終わりを思い描くことから始める」に関する章の冒頭において、読者に対し、「あなたのお葬式において、どんな弔辞を読んでもらいたいか」という質問がなされます。今の時代には弔辞はまれにしか読まれません、その人が個人としてどういう生き方をしてきたかを示す「ミッション・ステートメント」を作成することを、彼はこの章で読者に強く勧めています。

「自分はどうありたいか」とは、深く考えると、「自分が死ぬときにどういう存在でありたいか」ということです。年末に私はほんの少しですが、自ら死を意識する出来事があり、自ら死生観をもつことの必要性を感じる事ができました。「自分はどうありたいか」明確にした上で、自分のやりたいことを思い切りやって、自分らしい人生を生きることができれば幸せですね。

ちなみに、これを学校に置き換えたものがいわゆる経営理念とか、経営ビジョンと呼ばれるものです。学校であれば、「どんな学校で在りたいのか」。私の考えはやはり「トータル・サティスファクション」を担う学校です。お互いが少しずつ損をしてでも、子どもたちやそこに関わるすべての人の幸福を実現できる学校でありたい。そう思います、今でも強く。(令和4年2月22日)